北米日本人移民の架け橋：伴新三郎小伝

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6493

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

北米日本人移民の架け橋――伴新三郎小伝

田　口　孝　夫

はじめに

こんにち，伴新三郎（1853-1926）の名を知る人は少ない。＜ウィキペディア＞にも彼に関する項目は見当たらない。彼は明治から大正時代にかけ，北米で活躍した立志伝中の人物である。その生涯はかつてＮＨＫのラジオドラマで紹介されたことがあった。台本を書いたのは「朝日新聞」やＮＨＫで活躍したジャーナリスト，成澤玲川である。成澤はその著書『音と影――ラジオとカメラの随筆集』の「はしがき」で，「私はアメリカで伴氏の知遇を得，氏の創設した邦字新聞＜オレゴン新報＞にも関係した縁故」があると言い，さらに「私が未定稿同様なこの臺本を本書に入れた主たる理由は，伴氏の功績を廣く傳へたい念願に他ならない」と記している。[1] 同じように私が本稿をまとめるに至った理由も伴新三郎との縁故にある。彼は私のファミリー・ヒストリーに登場する人物（祖母の伯母の連れ合い）であり，[2] 私にも「伴氏の功績を廣く傳へたい念願」があるからである。

生い立ち

伴新三郎は嘉永６年（1853 年）３月４日，小禄の旗本，孫六郎（一説に孫六とあるのは通称か）の次男として江戸本郷に生まれた。３ヵ月後の６月３日にはアメリカの国使ペリーが浦賀に来航して江戸の町を騒然とさせた。世は幕末。激動の時代だった。彰義隊が上野の山に立てこもったのは新三郎 15 歳の慶応４年（1868 年）のことである。徳川家に恩義を感じていた祖母は彼を彰義隊に加わらせようとしたが，母はそれを拒んだという。この年，江戸は東京と改称され，慶応は明治となった。氷川隠士によれば，新三郎は榎本武揚が幕府の残党を率いて函館に向かったとき，太鼓たたきとしてこれに加わるはずだったが，不幸にも病気になって乗船できなかったとのことである。[3]

伴一家は孫六郎が若くして世を去ったこともあり，維新後は困窮の生活を

強いられた。当然, 新三郎は思うような教育を受けられなかったが, それでも, 明治 4 年（1871 年），率先して断髪し，当時，上野池ノ端にあったパーキンス英学塾に通うようになった。[4]　前述の成澤のラジオドラマ台本には，この英学塾で日本語の少しわかるアメリカ人の教師から英語を学ぶ生徒たちのほほえましい授業風景が描かれている。教師「シーではない　スィー」，生徒「シー」，教師「スィー」，生徒「スィー」，教師「さうさう　それ忘れないやうに」という具合である。新三郎は卒業後（一説には家庭の事情で中途退学して），領事館の書記生となり，上海，天津，香港などを転々とした。このころ，彼は鬱々たる日々を過ごしていたようで，岩谷禎次はその著書の中で「前途は唯闇の世界のみ。斯くて青春期の悲哀と煩悶の中に，自棄の涙を幾度か酒に紛らしたことであらう。有為の才は空しく草に埋れようとして居る」と記している。[5]

ハワイ領事館時代

成澤によれば，新三郎は明治 16 年（1883 年）に外務省に勤務するようになり，暗号電報の符号を作ることを命じられたという。彼の作った暗号は長いあいだ外務省で使われていたそうである。[6]　人生の大きな転機となったのは，かねてより親交のあった安藤太郎（1846-1924）がハワイ総領事に任命された折り，書記生としてホノルルへの赴任を要請されたことであった。ちなみに日本人が初めてハワイに移住したのは 1868 年（慶應 4 年，明治元年）4 月のことで，これがハワイのみならず海外への最初の移民団であった。

安藤太郎は新三郎同様，旗本の出身で，旧幕軍の海軍士官として榎本武揚と共に函館に走った人物である。当然，五稜郭に立てこもって官軍と戦ったことになる。しかし，その後，新政府に語学力を買われて外務省通訳官となり，岩倉使節団（明治 4 ~ 6 年）にも随行した。その安藤がホノルルに赴任したのは明治 19 年（1886 年）だったが，新三郎がじっさいに何年に赴任したかは不明である。佐々木敏二によれば，明治 20 年（1887 年）10 月 9 日，ホノルルに日本人共済会が作られたときにはまだ着任していないが，翌 21 年（1888 年）4 月 7 日の日本人禁酒会の発表式では，会長として安藤，また副会長として伴の名があるそうである。[7]　新三郎のハワイ渡航はこの約半年のあいだということになる。

安藤太郎といえば日本禁酒運動の始祖としても知られている。成澤のラジ

オドラマ台本には安藤と新三郎がハワイ総領事官邸で次のような会話をする場面がある。[8]

伴　「こんなに陽氣がよくて生活の樂な島に働いてゐる日本移民も，その日暮しが多いんですな」
安藤「そりや，伴君，主として酒のせいだよ。これや君にいふんぢやないがね，酒は罪悪の素だ。酒をやめれば女狂ひやばくちも自然少なくなる。僕は移民から酒を取上げるのが一番だと思ふが……」
伴　「耳が痛いですな，領事さん」

この会話は当時のハワイへの日本人移民が酒と賭博におぼれ，自堕落な生活を送っていたことを示している。安藤はこうした事態を憂慮して禁酒運動を起こしたが，彼自身はまだ酒を断っていなかった。

彼がみずから禁酒する決心をしたことについては面白いエピソードがある。明治 21 年（1888 年）12 月，時の逓信大臣榎本武揚が酒豪の安藤に日本から 2 樽の日本酒を届けてよこした。安藤は喜んだが，文子夫人はそれらの酒樽を夫が留守のあいだに馬丁に命じて掃き溜めに捨てさせた。それに火をつけたところ，終夜，燃え続けていたという。夫人がそうした大胆な行動に出たのは，当時ホノルルに滞在していた美山貫一牧師（1847-1936）の助言に従ってのことであった。それを知った安藤はみずからを恥じたのだろう，以後，二度と酒を口にすることはなかったという。美山牧師は安藤の禁酒運動や移民堕落対策の協力者だっただけでなく，安藤と新三郎を共にキリスト教に導いた人物でもある。[9] ともあれ，この時，酒好きだった新三郎も安藤にならって立派に禁酒党の一員となった。岩谷禎次は「好きな酒を禁めた伴氏の強固なる意志は，やがて氏を成功せしめた第一の原因であらねばならぬ」と記している。[10] 新三郎はこのハワイ領事館時代に，海外で働く日本人移民の実情に触れ，以後，移民たちの労働状況の改善のために尽力することになる。

移民状況視察

安藤は明治 22 年（1889 年）10 月に帰国，およそ 2 年後の 24 年（1891 年）8 月には移民課長に就任した。新三郎も安藤に従って外務省に戻っていたが，

まもなく，時の外務大臣榎本武揚からアメリカ移民の現状視察の内命を受けた。当然，安藤の口利きがあったものと思われる。新三郎はポートランドに上陸後，オレゴン，アイダホ，ワイオミング，ユタ等の州を視察し，日本人移民の現状を調査した。また，途上，オレゴン・ショートライン鉄道会社の総支配人バンクロフトと面会し，日本人を鉄道工夫として採用したらどうかと進言した。背後には中国人や白人の労働者たちは苦情ばかり言って熱心に仕事に取り組まないという事情があった。新三郎の人格と英語力はバンクロフトの心を動かして，この交渉を成立に導いた。そしてショートライン線の線路工夫として，日本から直航で 90 人の移民たちが送られたが，成澤によれば「これがアメリカに於ける日本人鐵道勞働の皮切りであつた」という。[11]

彼はこの北米移民の現状視察のあいだに，官を辞して民に下る決意を固めたようである。これは大きな決断だったにちがいない。彼は帰国後，北米への移民事業は有望であるが，指導者もなく統一性もない現状では大きな発展は望めないと榎本外相に報告し，それを成功させるためには民間人の力が必要だと意見を述べた。以下，氷川のことばを借りれば，「北米の移民事業は其の性質上に於て，領事が直接に管理すべきものでなく，寧ろ之等の移民勞働者を統一して相互の聯絡を保ち，且つ米國資本家との間に立つて利害の衝突を調和するに足るだけの私人が奮發して起たなければ成らぬとし，果ては自ら此の至難の局に當らむと決し」たのであった。[12] 彼の報告と決断を聞いた榎本外相は彼を激励したという。

また，視察の成果については別の話もある。以下，佐々木によると，新三郎は実地調査の過程でカナダのバンクーバーにあるユニオン炭鉱に立ち寄り，炭鉱が工夫 100 名を募集していることを知った。そこで彼は山口なる人物と神戸移民会社設立の話し合いをして（設立は 25 年 2 月），明治 24 年 11 月，広島県民 100 人をカナダに送り込むのに一役買った。しかし，移民の大半は探鉱の経験がなく，炭鉱労働者としてほとんど使い物にならなかった。新三郎は翌 25 年（1892 年）5 月，神戸移民会社副社長および現地駐在員としてポートランドに赴任し，移民対策に腐心した（外務省はすでに退職していた）。当時の移民たちの状況は悲惨なものだったらしい。おまけに，炭鉱はすでに生産過剰で閉山となっていた。それにもかかわらず，彼の知らないうちに福岡からさらに 73 人の新移民が送られてきた。当然，働き口を探し出すのは困難で，新旧の移民たちの生活は「困窮の極に達した」という。旧移民の中

には職を放棄し逃亡した者もあったが，新三郎は旧移民のためにしっかり後始末をして（責任を全うして）神戸移民会社を退職した。[13]

鉄道工事請負業

かくて新三郎は会社退職後，ポートランドに自分の事務所を立ち上げた。仕事内容は主として日本人移民のために通訳をしたり，宿泊所や就職口の世話をしたりすることであった。当時，ハワイからアメリカ本土に移住する日本人もいたが（これを＜転航組＞という），加えて日本から直航船で渡航する者も多かった。神戸港からポートランドへの直航船があったときには一度に数百人もの移民たちが乗船したという。[14]　彼らの中には一攫千金を夢みて新天地にやってきたものの，英語を喋れないうえにアメリカ事情にも疎く，路頭に迷う者が少なくなかった。新三郎は親身になってそうした移民たちの面倒をみたのであった。

当時，アメリカでは西部開拓が急速に進み，とくに鉄道や鉱山ではますます多くの労働力が必要になっていた。中国人をはじめ，新たに渡米してきたヨーロッパの貧民たちもそれらの労働に従事したが，彼らの評判は芳しくなかった。「高い賃銭を取る上に例の同盟罷工（ストライキ）を行つたり或は惰けたり」したらしい。[15]　しかし，新三郎が鉄道会社に斡旋した日本人は辛抱づよく真面目に働くので評判がよかった。彼は移民事業における豊富な経験と知識，また彼の人徳によって，次第にアメリカの鉄道関係者たちや日本人労働者たちから大きな信頼を寄せられるようになっていく。彼の鉄道工夫斡旋業は発展の一途をたどり，明治 37 年（1904 年）には，彼が請け負った鉄道は「海岸にはアストリカ線　沿岸には南太平洋線　大陸横断にはオレゴン短線及びバーリング線　サンタフエ線，コロバリス線」の「六大線路」にまで拡大していた。[16]

当時のアメリカにおける日本人労働者の雇用形態は＜ボス・システム＞と呼ばれるものであった。これは労働に従事する場合，本人と雇用者との直接交渉によるのではなく，中間にボスがいて，契約した会社に労働者を派遣するというシステムである。昔の＜口入れ屋＞，今の派遣会社のようなものと考えればいいかもしれない。これは他国からの移民社会にはみられない独特な制度である。鶴谷寿によれば，明治 24 年（1891 年）以降，「鉄道人夫の請負を思いつき，鉄道人夫のボスとなった日本人が続々と現われた」そうだ

が,[17] 新三郎はそうした鉄道ボスのひとりだったわけである。

しかし，彼は常に順風満帆だったわけではない。彼は多くの人種的偏見と戦わなければならなかった。彼が多くの鉄道工事を請け負うようになればなるほど，当然のことながら職を奪われたアメリカ人労働者から多くの憎しみを買うようになる。日本人労働者の家屋が放火されたり，白人労働者が大挙して事務所に押し寄せ，立ち退きを要求してきたりすることもあった。新三郎はこうした人種間のトラブルにも冷静に対応し,[18] 数々の苦境を切り抜けていったのである。

事業の発展

彼の経営する伴商店（1902 年ごろ設立？）はポートランド市北 3 番街 32-34 に本店を構え，支店はコロラド州デンバー市をはじめアメリカ国内に 5 店舗，日本には東京と大阪の 2 店舗が置かれていた。彼の関わった事業はおよそ 3 つに大別される。ひとつは上に述べたような鉄道工事を請け負う建設分野で，これがいわば伴商店本来の業務であった。もうひとつは日米の雑貨をあつかう実業分野で，ここでは日本の食料品・雑貨・日本酒等の輸入販売，アメリカ雑貨輸出販売，船便の切符取次，郵便業務等が行われた。いわば貿易商あるいは商社としての事業と言えるだろう。そして，もうひとつは意外にも林業であった。

建設分野で彼の傘下にある日本人工夫は 2000 人（一説には 4000 人）を超えていたと言われるが, 彼らの中には寒冷の地で働く者も多かった。彼らは, 冬季，積雪によって鉄道工事が中断されると職を失ってしまう。新三郎はそうした鉄道工夫たちの職を確保するために，クインシー山（オレゴン州）の森林を購入し，山林伐採や屋根板製造の事業を起こした。彼は林業には素人だったが, これもまた大成功を収め, 白人労働者にも職を提供することになった。岩谷は「今や林業界で氏の右に出づる者は一人もなく，殊に＜伴の屋根板＞といへば，知らぬものはない 位ゐ有名なものとなつた」と言っている。また，明治 39 年（1906 年）4 月，サンフランシスコ大地震の際には電柱用の材木を供給したことも成功に拍車をかけたようである。[19]

さらに彼は開墾した土地を利用して牧畜事業にも乗り出した。彼の牧場で生産される牛乳・クリーム・バター等は優良品として歓迎され,「その乳牛及製品は博覧會で 1 等賞金牌をうけ」るほど評判がよかったそうである。[20]

こうした彼の林業の拡大によってやがて山間の僻地に村落が誕生し，インフラの整備が行われるようになった。切り出された材木を運搬するためには鉄道の駅が必要となる。その結果設けられた駅の名はバン・ステーション。アメリカに初めて日本人の名を冠した駅が誕生したわけである。

ポートランド在留日本人のリーダーとして

新三郎が受洗したことは前に触れたが，彼は明治 26 年（1893 年），ポートランドにメソジスト教会が創設されて以来の教会の役員であった。田村紀雄によれば，「当時ポートランドは，賭博，醜業婦，ゴロツキが跳梁し日本人コミュニティは，最悪の状態であった」という。[21] 新三郎は教会関係者と協力して，こうした悪弊と戦うべく，在米日本人の教化に努めたのであった。また，彼は明治 37 年（1904 年），日本語新聞「オレゴン新報」を創刊した。これはもともと伴商会の機関紙であったが，その後，プロのジャーナリストの手に委ねられた。彼は新聞の魅力を十分理解しており，それまでにも他の日本語新聞に対して後援者となったり資金援助をしたりしていたようである。[22]

同年，日露戦争が勃発すると，彼はポートランドの在留日本人の集会で熱弁をふるった。成澤のラジオドラマから新三郎の演説を以下に引用する。

> 諸君！　繰返していふ，祖國は今や未曾有の國難に當面してる。我々在米同胞中兵役に關係ある者は速かに歸朝して銃を執り，その熱血を祖國の為に捧ぐべきである。而もアメリカに留まる多數の同胞はその汗の結晶を獻金して母國を激勵すべきである。（中略）私は最後に報國同盟會の組織を提唱する（拍手大喝采）これによつて全在留同胞を打つて一丸として速かに獻金募金運動に着手せんことを望むのである。

これは彼の演説の忠実な再現ではないにしても，趣旨はこの通りであったろう。じっさい，彼が報国同盟会の会長として募った寄付金は当時の金額で 32,800 円に達し（当時の 1 円は現在の約 2 万円に相当），これが日本政府に献金されたのであった。[23] 彼の愛国の情が偲ばれる。日露戦争における日本の勝利は在米日本人の地位をも向上させた。その後，オレゴン州に日本人会が組織されると，彼は初代会長に推され，10 年の長きにわたってその座に

あり，会の発展に尽くしたのであった。

しかし大正 7 年（1918 年），第一次大戦終結後，彼の事業は傾き始めた。さらに悲運が彼を襲った。帰国中の大正 12 年（1923 年），関東地方が大震災に見舞われ，東京の伴商店が焼失したり，また，ポートランドでも取付け騒ぎが起こったりして，やがて伴商店は倒産のやむなきに至ったのである。[24]

新三郎は晩年を東京板橋の邸宅で過ごしたが（ここに彼の牧場があった），大正 13 年（1924 年），74 歳の生涯を閉じた。功成り，名を遂げての輝かしい生涯だったと言えるだろう。彼は身長 5 尺 8 寸（約 176 センチ），当時としては背が高く，包容力があり，人から好かれる魅力的な人物だったようである。彼の在世中に書かれたいくつかの立志伝をみると（すべてを鵜呑みにすることはできないにしても），英語に堪能で，意志が強く，正義感があって…等々，彼に対する畏敬の念が伺われる。偉人扱いと言ってもいい。大正 5 年に出版された岩谷の著書はそうした文献のひとつである。彼は伴新三郎の略伝を「金と人格と」という見出しで書き始めているが，その一節は本稿の結びとして最適であろうと思われる――「山が運よく當つて俄かに大盡風を吹かせる所謂成金長者に對して吾々は何等の尊敬を拂ふことは出来ない。（中略）米国ポートランドに瀟洒たる邸宅を構へて，日本の代表紳商として強固なる信用を米國の實業者間に博して居る伴新三郎氏は決して斯うした風の成金黨ではない。＜吾は唯この一事を慕ふ＞とは氏の終始一貫した大信條である。この信條に依つて氏は巨萬の富を勝ち得たのである。たとへ氏の身邊からこの巨萬の富を取り去つたところで，人間としての氏の價値には何等の變りはない」。[25]

注

1. 成澤玲川著『音と影――ラジオとカメラの随筆集』（三省堂，昭和 15 年），pp.2-3.
2. 私のファミリー・ヒストリーとの関連については，拙稿「＜伴のおばさん＞と伴新三郎」（日英言語文化学会編『随想集――言語・文化・教育に思いを寄せる』2016.2）参照。なお，本稿はこの随想と一部重複するところがある。
3. 氷川隠土著『現代実行家立身伝』，磯部甲陽堂，1912），p.202.
4. 新三郎が通った英語学校については，氷川（前掲書）では「明治四年外務省の設けたる外國語學校に入り，卒業後は領事館の書記生と成つて…」とあるが，

明治5年8月頃の外務省語学所（氷川の言う「外國語學校」）のスタッフには6名の＜教授手伝＞がおり，その中のひとりとして＜伴新三郎＞の名前が見える（外務省100年史編纂委員会『外務省の百年（上巻）』原書房，昭和44年，p.79.）。彼は「外國語學校」を卒業したのではなく，英語力を買われて教員として採用されたのではなかったか。

5. 岩谷禎次著『腕一本から：成功活歴』（東亜書房，1916），p.121.
6. 成澤，前掲書，p.118.
7. 佐々木敏二「榎本武揚の移民奨励策とそれを支えた人脈」『キリスト教社会問題研究』37号（同志社大学人文科学研究所），p.544.
8. 成澤，前掲書，p.119.
9. ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』（ハワイ日系人連合協会，1977），pp.131-9.
10. 岩谷，前掲書，p.123.
11. 成澤，前掲書，pp.120-121.　なお，この部分の記述はほぼ氷川（前掲書）p.203.と一致する。ただし，これには異説もあって，鶴谷寿著『アメリカ西部開拓と日本人』（NHKブックス，1977年）には「アメリカ西部の鉄道の建設や保線のために，日本人鉄道工夫が本格的に働くようになったのは…田中忠七が1891年（明治24年）に＜ユニオン・パシフック鉄道会社＞と人夫請負契約を結び，30名ほどの日本人労働者を供給したのが始まりであるといわれている」という記述がある。
12. 氷川，前掲書，p.204.
13. 佐々木，前掲書，p.545.
14. 同上，p.203.
15. 桜府隠土著『在米成功の日本人』（宝文館，1904），p.140.
16. 同上，p.144.
17. 鶴谷寿，前掲書，p.132.
18. 成澤，前掲書，pp.126 - 135.　ここには日本人家屋放火事件や日本人立退要求の場面が臨場感たっぷりにドラマ化されている。
19. 岩谷，前掲書，p.126.
20. 成澤，前掲書，p.137.
21. 田村紀雄編著『正義は我に在り――在米・日系ジャーナリスト群像』（社会評論社，1995年12月），p.37.
22. 同書，pp.69-70.「オレゴン新報」については同書所収の論文「ポートランドの新聞事情と伴新三郎」に詳しい。
23. 成澤，前掲書，p.139.
24. 佐々木，前掲書，p.546.
25. 岩谷，前掲書，pp.119-120.

謝辞：本稿で参照した資料の一部は伴文康氏から提供されたものである。この場を借りて謝意を表したい。氏は新三郎の兄清忠氏の孫で伴家 12 代当主に当たる。現在，新三郎の伝記執筆準備中とのことであるが，一日も早い著書の上梓を願う次第である。